

## 中原中也の「見た」人魚

山口 豊  
(武庫川女子大学教育学部教育学科)

### A mermaid imagined by Chuya Nakahara

Yutaka YAMAGUCHI

Department of Education, School of Education  
Mukogawa Women's University

#### Abstract

The word “mermaid” appears in the poem “North Sea”, one of Nakahara's masterpieces. Mermaids are legendary creatures that are well-known regardless of whether they are east or west, but their images differ greatly. The Western mermaid was a bright image, while the Eastern one was dark.

Before Nakahara released this work, Mimei Ogawa wrote a fairy tale “Red Candles and Mermaids” and claimed that Nakahara was greatly influenced by this work.

#### 1. 中原中也「北の海」の先行研究による解説

海にいるのは、  
あれは人魚ではないのです。  
海にいるのは、  
あれは、浪(なみ)ばかり。  
曇った北海の空の下、  
浪はところどころ歯をむいて、  
空を呪っているのです。  
いつはてるとも知れない呪。  
海にいるのは、  
あれは人魚ではないのです。  
海にいるのは、  
あれは、浪ばかり。

中原中也の詩の中でも有名な「北の海」は、昭和10年(1935年)2月の作で、「歷程」の昭和10年5月号に掲載されたのち、詩集『在りし日の歌』の30番目に収録されているものである。

この詩の解釈をめぐることは、これまで多くの人がそれぞれの評を行っている。

「中原の詩の中で一般に知られているのは、「北の海」のような種の詩である。それは童謡風で少年の孤独な訴えに近いものがあるが、しかし冷たいイメージとして凍りついている詩情ではなく、永遠につきることのない寂寥感として流れている。そこに意識的な近代詩の主知的手法と対立する彼の住み場所がある。」吉田精一『中原中也詩集』<sup>(注1)</sup>

(山口)

「詩題「北の海」とは、寒々と冷たい女性の暗喩であろう。中也身邊の寒々とした女性とは、心ならずもめとった妻T女以外にはあるまい。妻の海に”人魚”がいなくて”浪”だけがあるとは、妻に愛の魂が欠けていてただ愛の形式のみがある—との謂いであろう。そのT女の愛と相容れぬのはむろん、過ぐる日のH女の愛である。二聯の〈T女が歯をむいてH女を永久に呪う—〉というのはどうも苛酷な表現ではあるが、過去のH女を忘れ得ずしてなお迎えた妻に対する中也良心の苛責が、かかるイメージを定着せしめるに至った—と考えられよう。ともあれ、この詩などは新妻を主題とし、H女を副次としている点が珍しく、またそのことが注目される作品ではある。」太田静一『中原中也詩研究』<sup>(注2)</sup>

「この「空」は「曇った空」として抑圧的で停滞した、出口なしの気分を示し、「浪」は荒涼として「北海」の動きとして戦闘的な志向を示すと解することができる。(中略) 初期短歌にいう「悪魔心」の表現と理解したい」吉田瀬生『中原中也必携』<sup>(注3)</sup>

「詩人の心はさむぎむとした寂寥にみちているが、だからといって荒廃しているわけではない。彼の心は波の単調だがくりかえして倦まない徒労に慰めをみているのだし、うかびくる人魚の幻想と、それを打ち消すことに心の安らぎを覚えている。そして、ここには詩人の北の海への共感がある。」中村稔『中也を読む』<sup>(注4)</sup>

「従来の読みでは、中也の残した詩の背景は満たされておらず、空しい「ことばばかり」が残されていたように思う。だが、「北の海」には、もっと普遍的な憂鬱と悲しみ、喪失感を読むことができると思うのである。」松本修「中原中也の「北の海」における人魚について」<sup>(注5)</sup>

このように詩の解説は様々である。というのもいきなり「人魚」という言葉が出てきたと思うと、すぐにそれを否定することで読者にとまどいと疑問を与えるからである。

中原中也の詩の中に人魚が登場していない。人魚ではなく浪だというのである。

ではどこに人魚はいるのだろうか。いないと否定するからには、中也のいう人魚がいるはずなのである。あるからこそないといえるのである。

そこで本稿では中也がそこにはいないと言った人魚、いい換えれば中也が「見た」とすればどのようなイメージの人魚だったのかということについて考えてみるとともに、どうしてそのような発想に至ったのかということについても言及していきたい。

## 2. 人魚のイメージ

そもそも我々は人魚についてどのようなイメージを持っているのだろうか。

平成が終わり、令和の時代を迎えた今も我々の周りには人魚のイメージが描かれているものが多く存在する。デンマークの人魚像をはじめ、ディズニーアニメ、劇団による舞台芸術、映画、漫画、ポートレースやエステサロンのコマーシャル映像など人魚をあちらこちらでよく見かける。誰も一度も実物を見たことがないにもかかわらずである。

そこで、現代の女子大学生たち 100 名に以下のようなアンケートを行い、彼女たちの持つ人魚のイメージを探ってみることとした。

質問 あなたの「人魚」に関するイメージを教えてください。

- A 性別は ・男 ・女 ・両性具有
- B 髪の毛の長さは ・身長ほどの長髪 ・背中までの長髪  
・首までの短髪 ・肩までの短髪 ・その他
- C 髪の毛の色は ・黒 ・金 ・緑 ・茶 ・赤 ・その他
- D 肌の色は ・アジア系 ・欧米系 ・インド、アフリカ系 ・その他

- E 瞳の色は ・黒 ・金 ・青 ・茶 ・その他  
F 体臭は ・する ・しない  
G どんな能力を持っていると思いますか  
H 人魚というとなんか物語を思い出しますか。

回答を集計したところ、次のような結果が得られた。

A 性別については、男(0%)、女(92%)、両性具有(8%)であり、圧倒的に女性のイメージが強い。

B 髪の長さは、身長ほどの長髪(11%)、背中までの長髪(86%)、首までの短髪(0%)、肩までの短髪(0%)、その他(3%)であり、やはり長髪のイメージが多いことがわかる。

C 髪の色は、黒(8%)、金(52%)、緑(0%)、茶(8%)、赤(29%)、その他(3%)であり、金髪と答えた者が多く、黒髪と答えた者は一割にも満たなかった。

D 肌の色は、アジア系(11%)、欧米系(84%)、インド・アフリカ系(1%)、その他(4%)であり、金髪の女性の肌ということで白い肌を想像している者が多かった。

E 瞳の色は、黒(6%)、金(3%)、青(77%)、茶(12%)、その他(2%)であり、やはり白人女性のイメージである。

F 体臭は、する(10%)、しない(90%)であり、しないと答えた者が多かったが、いい匂いがすると答えた者も数名いた。

G 能力については、陸上でも水中でも呼吸できる能力、魚と話ができる能力、歌がうまい、魔法が使えるといったことを挙げていた。

H 人魚というとなんか物語を思い出しますかという問いの回答として何ととってもアンデルセンの「人魚姫」、ディズニーの「リトルマーメイド」と答える者が圧倒的に多かった。

今私たちが抱く人魚のイメージはアンデルセンの「人魚姫」、ディズニーの「リトルマーメイド」に代表されるイメージが大半であるといっておいたろう。

大正6年に発表された谷崎潤一郎の小説「人魚の嘆き」に登場する人魚も同様のイメージで語られている。本文は『人魚の嘆き・魔術師』中公文庫 1978 による。

・その瞳は、ガラス張りの器に盛られた清冽な水を透して、あたかも燐のように青く大きく輝いています。(中公文庫 34 頁)

・暗緑色の髪の毛は海藻のように顫え悶えて(同 34 頁)

・彼の女の純白な、一転の濁りもない、皓潔無垢な皮膚の色でした。(同 35 頁)

・麝香のような馥郁たる薫りを、部屋の四方へ放ちました。(同 36 頁)

このことから我々が抱く人魚のイメージは色の白い美しい風貌をしていると捉えていると言っておいたろう。谷崎は人魚の故郷を「地中海」であるとも記している。

こうしたイメージの人魚を仮に「アンデルセン型人魚」と呼ぶとすれば、彼女たちには共通した特色がある。それは呪力を持っていないということである。アンデルセンの「人魚姫」は人間に恋をし、成就しなければ泡になってしまうというのに、我が身を顧みず呪うことはしていない。コーヒーチェーンのスターバックスのロゴであるセイレーンという人魚も歌声で人々を惑わすことで西洋では恐れられる存在でもあるが、恨みを抱いて船乗りたちを呪うことはしない。

谷崎の作品に出てくる人魚も嘆きこそするが、主人公の貴公子を呪ったりしていない。

このように暗さや哀しみを抱えた人魚も存在するが、概して西洋の人魚のイメージとして思い浮かぶ、人を呪わない「アンデルセン型人魚」に対して、人を呪う人魚も存在する。それは中国・日本に古くから伝わる人魚たちであり、仮に「呪怨型人魚」と呼ぶことにしよう。

その「呪怨型人魚」の典型が八百比丘尼伝説の人魚や小川未明の「赤いろうそくと人魚」に出てくる人魚である。

この詩と小川未明の関連についてはすでに萩原昌好が「詩を「読む」ということ ―抒情への接点を求めて―」という論文で指摘している<sup>(注6)</sup>。萩原もまた「呪い」に注目し、「この人魚のイメージは西洋のメ

ルヘンの中の人魚ではあるまいという考えが浮かび出て来る。それは日本化された人魚であり小川未明の「赤いローソクと人魚」の人魚であると思う」と述べている。

ところで、日本における人魚の記述は『日本書紀』にもあり、619年頃であったという。

原文：廿七年夏四月己亥朔壬寅、近江國言、於蒲生河有物。其形如人。○秋七月、攝津國有漁父、沈罾於堀江。有物入罾。其形如兒。非魚非人、不知所名。(『日本書紀 下』 日本古典文学大系 68 202頁)

書き下し文：二十七年の夏四月の己亥(つちのとあ)の朔壬寅(ついたちみずのえとらのひ)に、近江国言さく、「蒲生河に物有り。其の形人の如し」とまうす。秋七月に、摂津国に漁父有りて、罾(あみ)を堀江に沈けり。物有りて罾に入る。其の形児の如し。魚にも非ず、人にも非ず、名けむ所を知らず。

現代語訳：二十七年の夏、四月一日に近江国で言うことには、蒲生河である物がとれたが、其の形は人のようであった。その年の七月に摂津の国のある漁夫が網を堀江に沈めたところ、何者かが網にかかった。その形は子供のようであり、魚でもなく、人間でもなかった。何というものかわからなかった。と記載されている。

1254年に成立したとされる『古今著聞集』にも人魚の記述がある。

原文：七一 伊勢國別保の浦人人魚を獲て前刑部少輔忠盛に献上の事

伊勢國別保といふ所へ、前刑部少輔忠盛朝臣くだりたりけるに、浦人日ごとに網をひきけるに、或日犬なる魚の、かしらは人のやうにてありながら、齒はこまかにて魚にたがはず、口さしいでて猿にいたりけり。身はよのつねの魚にてありけるを、三喉ひきいだしたりけるを、二人してにいたりけるが、尾猶つちにおほくひかれてけり。人のちかくよりければ、たかくをめぐこゑ人のごとし。又涙をながすも人にかはらず。おどろきあさみて、二喉をば忠盛朝臣のもとへもてゆき、一喉をば浦人とりてけり。

忠盛朝臣おそれ思けるにや、すなはち浦人にかへしてければ、うらみなきりくひてけり。されどもあへてことなし。そのあぢはひことによりけるとぞ。人魚といふなるは、これ訂の物なるにや。(『古今著聞集』 日本古典文学大系 84 533頁・504頁)

現代語訳：伊勢国の別保という所へ、前の刑部少輔である忠盛朝臣が京から任官したときに、浦人は毎日網をひいていたが、ある日犬きな魚が、頭は人のようにてありながら、齒は細かく魚と同じであり、口は飛び出していて猿に似ているものが網にかかった。からだは普通の魚のようであったが、三匹網からひきだして、二人がかりで担いだけれども、尾は地面につくほどであった。人がちかくに寄ると、たかくわめく声は人のようであり、又涙をながすのも人とかわらなかつた。おどろいて二匹ば忠盛朝臣の所へ持ってゆき、一匹を浦人がとった。忠盛朝臣はおそろしく思ったのだろうか、すぐに浦人に返してきたが、浦人たちは残りの一匹をみんなで切って食べてしまっていた。しかし特になにごともなかつた。その味は特によかつたということだ。人魚というものは、こういうものをいうのだろう。

江戸時代になると、怪異譚が多く語られるようになるが、井原西鶴が『武道伝来記』の「命とらるる人魚の海」や『好色一代男』の「夢の太刀風」という作品で人魚を書いたり<sup>(注7)</sup>、絵師の鳥山石燕が『今昔百鬼拾遺』で人魚の姿を描いたり<sup>(注8)</sup>、寺島良安により『和漢三才図絵』などが作成されたりしている。

また、日本ではこうした文献に現れる資料の他に、口承伝承が多く残されている。肉を食べたため死ねない体になった八百比丘尼伝説や佐渡の娘と旧大潟町の若者の悲しい恋物語「人魚伝説」<sup>(注9)</sup>などがそれである。日本における人魚の出現記録や人魚伝説の分布については吉岡郁夫「人魚の進化」<sup>(注10)</sup>に紹介されている。

さらに各地には人魚のミイラなどが多く伝わっている。それらは江戸時代に作られた興行用の精巧な細工物が多いが、いずれも美形のイメージのある「アンデルセン型人魚」とは正反対のグロテスクで凄惨なイメージのものが「呪怨型人魚」なのである。佐賀県佐賀市本庄町の東光寺には両目をぎよろつかせた男性の人魚の掛け軸が残っているという。しかし、江戸時代中期以降、人魚は遊女のイメージが重ねられ、明治になってアンデルセンの翻訳が広まると、人魚のイメージは一気に「アンデルセン型人魚」に書き換えられていき、谷崎をはじめこの世のものとは思えない美しさを持ったものとして日本人の心にも定着していったのである。

### 3. 小川未明の描いた人魚

「人魚は、南の方の海にばかりすんでいるのではありません。北の海にもすんでいたのであります。」という文から始まる「赤いろうそくと人魚」は小川未明が大正 10 年に発表した作品である。

寂しい北の海に住む人魚は、明るく見える人間の世界に憧れ、我が子を人間の手で育ててもらえば、きっと幸せに育つに違いないと信じてとある山のお宮に我が子の人魚を産み落とす。それを麓の蝋燭屋の老夫婦がを見つけ、大切に育てていく。大きくなった娘の人魚が絵を描いた蝋燭をお宮に灯し、その燃えカスを身に着けるとどんな嵐の時でも遭難しないというご利益があり、店は繁盛していく。

ある日香具師が老夫婦の前に現れ、言葉巧みに大金を渡し、人魚を身売りさせてしまった。懇願も聞き入れてもらえなかった人魚は真っ赤に塗った蝋燭を置いてゆく。恨みに思った人魚の母親と思しき者が赤い蝋燭を買い取り、お宮に灯すと大嵐が起り、香具師の船も転覆する。それ以来お宮に赤い蝋燭が灯されると不吉なことが起こるので、とうとう蝋燭屋をはじめ、町も寂れてしまったという悲しい童話である。

小川未明は新潟の生まれで、北陸には人魚の肉を食べたため、死ねない体となり数百年も生き永らえざるを得なかったという八百比丘尼伝説もあり、こうした恨みを抱いた人魚の話も聞いていたと思われる。九頭見和夫は『日本の人魚像』（和泉書院）の中で、「時期的に見て小川未明は、同じ童話作家の西城八十が翻訳したこの「人魚ものがたり」に刺激を受け、これまであたためてきた越後伝説をモチーフにした童話を二ヶ月後の大正一〇年二月、「東京朝日新聞」に『赤い蝋燭と人魚』の題名で発表した可能性は低いと推測される<sup>(注11)</sup>。」と述べている。

作家が他の作品に刺激を受け、モチーフとすることは珍しくない。芥川龍之介が『今昔物語集』をモチーフに「鼻」や「地獄変」を書いたり、太宰治が西鶴の『武道伝来記』の「命とらるる人魚の海」をモチーフに「人魚の海」を書いたりしていることは有名な話である。

もちろん、作家である以上、そのまま使うのではなく、自分なりの解釈や設定を加えてアレンジしている。小川未明は「アンデルセン型人魚」では日本海の荒波にはふさわしくないと感じ取り、自分の作品に描いた人魚は「日本型人魚」であり、人間に恨みを持ち、仇をなす存在としての人魚を選択したのである。

確かに「大きくなるにつれて黒眼勝な美しい、頭髪の色ツヤツヤとした、おとなしい伶俐な子となりました。」とあるように「アンデルセン型人魚」のような一面もあるが、同時に「絵の描いた蝋燭の燃えさしを持ってさえいれば、決して海の上では災難に罹らなかつたものが、今度は、赤い蝋燭を見ただけでも、その者はきっと災難に罹って、海に溺れて死んだ」という呪力も持っている「呪怨型人魚」であったのだ。

### 4. 小川未明との共通点

では、改めて中原中也「北の海」に使用されている語と小川未明の「赤いろうそくと人魚」を比較してみよう。

「北の海」という語は「人魚は、南の方の海にばかりすんでいるのではありません。北の海にもすんでいたのあります。」という冒頭の語と一致する。

その「北の海」の「浪はところどころ歯をむいて」いるのだが、それは荒れた海を表していることはいまでもない。これは未明のいう「はてしもなく、何方を見まわしても高い波がうねうねとうねっています。そして、岩に砕けては、白い泡が立ち上っています。」という表現に相当する。

次に「いつはてるとも知れない呪」という文である。中也の「呪」とはどのようなものだったのだろうか。

九頭見の「わずか二歳でこの世を去った長男文也にささげられたこの詩集は、その一年後結核性脳膜炎で障害を終える中原中也の深い絶望感を表現している。(中略)長男文也を失った中原中也のみつめる北の海には、人魚の姿はなくただ人間を飲み込んでしまうかもしれない恐ろしい浪ばかりである。」という指摘は文也が亡くなるのは発表した翌年であるから当てはまらず、愛する者を失ったことへの呪いではない。

その「呪い」は「いつはてるとも知れない呪い」である。信頼していた人間に裏切られた悲しみは呪いや恨みとなって、自分の心を苦しめ続けるのだ。それこそ「いつはてるとも知れない」のであり、「曇った北海の空」に表されるような「心の様子」を未明の作品を通して実感できるのである。

そして「人魚」という語である。穏やかな南の海を見て人魚を思い浮かべる人はいても、荒れ狂う北の海の波を見て、人魚を想像する人はまずいないだろう。にもかかわらず、中也は「人魚」という言葉を使っている。ここに未明の「赤いろうそくと人魚」を踏まえて、詩の世界へと誘っているとすれば、読者は納得するに違いない。

## 5. 「北の海」の成立について

中原中也と太宰治の仲が悪いのは有名な話である。檀一雄の「小説 太宰治」に酒の席で中也が太宰に絡み、取っ組み合いの喧嘩になったことや中也が酔って太宰の家に押しかけたりしたことが書かれている。太宰も中也のことを「ナメクジみたいにてらてらした奴で、とてもつきあえた代物じゃない」とこき下ろしたと言ったともいわれている。

そんな太宰が西鶴の『武道伝来記』の「命とらるる人魚の海」を『新潮』に「人魚の海」としてアレンジした作品を発表しているが、これは昭和19年に出版されたものであるから、太宰の作品に反対する気持ちで書いたものでないことは明らかである。

とすれば、やはり中也に大きな影響をあたえたものは小川未明の「赤いろうそくと人魚」の世界ではなかっただろうか。中原中也の「見た」人魚は髪を振り乱して呪い続ける哀れな人魚だったのである。

未明と同じく童話作家でもあった宮沢賢治に中也は大変感銘を受けている。「宮沢賢治の詩」「宮沢賢治の世界」を書いたり、『銀河鉄道の夜』に刺激をうけて昭和9年には「夜汽車の食堂」という童話を書こうとしたりしている。

また、中也の代表作「一つのメルヘン」も宮沢賢治の影響を受けているという指摘もある<sup>(注12)</sup>。

こうした中也であるから、小川未明の作品の影響を強く受け、自身の思いを重ねて「北の海」という独自の作品世界を作り上げたのであろう。

青木健は「一つのメルヘン」を『銀河鉄道の夜』への一つの反歌のようにして成ったのではないだろうか」と推測している<sup>(注13)</sup>。

「反歌」は長歌の後に置かれ、長歌の意の要約、補足や、比較的客観的に事を叙した長歌に対し詠嘆するものなどが多いが、なかには同時同所の作という理由で反歌とされているものもあるという。

その意で言えば同じように「北の海」にも当てはまる。中也の詩の中の人魚は姿こそ現していないが、確かにそこにいる。中也が「見た」と感じる人魚は呪う人魚であり、未明の作の母親の人魚と同じく、悲しみを白く砕ける波に託している。それゆえこの「北の海」もまた「赤いろうそくと人魚」という作品の「反歌」としてとらえてよいと考えている。

注1 吉田精一『日本の詩集 10 中原中也詩集』 角川書店 1968

注2 太田静一『中原中也詩研究』 審美社 1966

注3 吉田瀬生『中原中也必携』 學燈社 1981

注4 中村稔『中也を読む 詩と鑑賞』 青土社 2001

注5 松本修 「中原中也の「北の海」における人魚について」 上越教育大学国語研究 11 1997

注6 萩原昌好「詩を「読む」ということ ―抒情への接点を求めて―」月刊国語教育研究 266 日本国語教育学会 1994

注7 花咲一男『江戸の人魚たち』 太平書屋 1978 「菱川師宣が連続絵画本として編作した『大和絵のこんげん』下巻に、頭は女。あし鳥のごとし。胴体は魚にまぎれず。浪の磯による声のして。世之介さま。我を忘れ給ふか。石垣町の鯉屋の小まんの執心。思ひしらせんといふ。」とあり、恨みを述べている。P88

注8 鳥山石燕『今昔百鬼拾遺』 国書刊行会 1992 中国の『山海経』の影響を受けている。P192

注9「人魚伝説」 佐渡に住む女性が本土に住む男性と恋仲になり、男性の灯す明かりを目印に毎晩通っていたが、

男性に別な女性が現れ、ある夜は明かりを見つけなかった。そのため女性は目印を失って溺れ死んだが、その後人魚になったという伝説が新潟県上越市にあるという。

注 10 吉岡郁夫「人魚の進化」『比較民俗研究』8 比較民俗研究会 1993

注 11 九頭見和夫『日本の人魚像』和泉書院 2012

注 12 中野新治『『一つのメルヘン』成立に関する一考察 -宮沢賢治「やまなし」との比較から-』日本文学研究 33 梅光女学院大学

注 13 青木健「もうひとつの「銀河」物語」別冊太陽中原中也 平凡社 2007

受理日 2019年11月16日